

冬の月

おれが久々知先輩じゃなくて、久々知くんの気持ちに気が付いたのは、つい最近のことだった。

季節は晩春から初夏へと移りつつあった。時折、橘の香を孕んだ清々しい風が木々の梢を揺らして

行った。眼にも鮮やかな橙に空が染まる頃、補習から解放されたおれは重い足取りで食堂へ向かっていた。心身共に疲れ切っているにも関わらず、様々な思いが脳裏を交錯しては消えて行った。

ある日、父の思い出漸から大好きだった祖父が偶然にも忍であることを知った。祖父や父のような髪結いになることを夢見て修行していたおれには、まさに青天の霹靂だった。父に認められ髪結いとして一人立ちして客を取って居たのにも関わらず、祖父のもう1つの顔を知ってからというものの仕事が

手に付かなくなっていた。孫のおれを、それこそ猫も厭がるほど可愛がってくれたひとの裏の顔が忍であったとは俄かに信じられなかったからだ。それこそ忍としての存在を隠すために家族を作り、後継と定めた父以外は真実を話さず偽り続けたことになる。もしそれが真実なら、祖父がおれに注いでくれた愛情も他人の眼を欺くための手段だったのであるか。

確かめようにも、祖父は疾うに亡くなっているし、父に問い詰めても納得のいく答えは返ってこなかった。唯一の手掛かりは、生前、祖父が頭に7つの旋毛を持つた

男と何やら密談を交していたということ。手取り早く祖父の軌跡を追うため、おれは辻刈りを始めることにした。

父の制止を振り切りおれは頭に7つの旋毛を持つた男を探し当てようと道行く人々の頭を次々と刈っていった。

今、思い返せば無関係な人々を餞食にし、辻刈りと云う傍迷惑な悪行の限りを尽くしたおれに弁解の余地もなかった。ひよんなことから忍術学園に籍を置く乱太郎、きり丸、しんべえに出会ったことによりおれの運命が大きく変わることになった。やがて祖父の過去を追うために、おれは忍びを目指すことになった。